

〔共同研究：現代人の生活のリズムと健康・体力〕

## 当麻寺を訪ねて

井 本 英 一\*

1999年3月2日と3日、松浦道夫教授・高橋ひとみ助教授が主宰する共同プロジェクト「現代人の生活のリズムと健康」の宿泊研修会が河内長野市の河内長野荘で開かれた。3月2日16時30分から研修会を開き、その夜は河内長野荘で一泊し、翌日は奈良県当麻寺を訪問した。

参加者は松浦道夫教授、井本英一教授、高橋ひとみ助教授（桃山学院大学）、中永征太郎教授（ノートルダム清心女子大学）、藤間繁義本学名誉教授の5名であった。

このたびは、井本英一が「当麻寺の歴史に学ぶ古代人の生活のリズム」の題で報告した。

当麻寺の創建は白鳳時代と伝えられ、詳しいことは不明のようであるが、それは仏教文化と共に西アジアの文化が流入した時代であるので、西アジア文化を視野に入れた文化史の上では興味ある問題点をもっている。

報告は古代人の生活のリズムに関するものに絞った。古代人は、現代科学が行う計測的な身体のリズムとは縁がなかったが、個人の一生は植物、ことに主食とする米・麦・穀類の一生と同じように、この世に生を受け、太陽のもとで成長し、死んでゆくものだと考えた。穀物は完全に枯死して、種子が地上に落ち、半年ほど地下で生活し、春になると再び芽を出して成長する。人間は埋葬されたあと、その魂は穀物の中に入って成長したり、樹木として成長すると考えられた時期があった。

別の考え方もあった。人間は死ぬと裏山に帰る。魂は樹木の中に宿るか、猪、狸、狐、猿、狼のような野獣や鳥や雀や雉のような野鳥になる。馬、牛、犬、猫、山羊、羊、豚、鶏のような家畜にも人間の魂が戻ってゆくと考えられた。

人間の魂は、死後これらの動植物の中に入り、それらの動植物の死後、また別の動植物の中に入ってゆく。魂は輪廻転生を繰り返す、いつかはまた人間に入って、人間に生まれ変わると考えられた。ヘロドトスによると、古代エジプト人は三千年のち、人間の魂はこのような遍歴をとげたあと、また人間の肉体に入ると考えた(2.123)。ゾロアスター教では魂の一つをフラワシという。フラワシは個人の生まれる前からすでに存在し、個人の死後も存在すると説かれている。フラワシは輪廻転生する魂である。

三世紀の中国の『問礼俗』にいう。正月一日を鶏となし、二日を犬となし、三日を羊となし、四日を豚となし、五日を牛となし、六日を馬となし、七日を人となし、八日を穀物となす。古くは鶏を殺すとその魂は犬に移り、犬を殺すとその魂は羊に移り、…馬を殺すとその魂は人に移り、人を殺すとその魂は穀物に移った。

釈迦はその前生に於て、菩薩道を修するため鹿、熊、犬、兎などに生を受け、あるいは粟散王、転輪聖王、龍、金翅鳥の生を受け、衆生のために身を捨て善行を積み、現在の地位に達した。ことに捨身に関しては、釈迦は過去世において、薬王菩薩、薩埵太子、雪山童子としてわが身を布施することによって修行を重ねた。釈迦の前生物語を本生譚というが、南伝仏教では547のパーリ語経典が伝えられている。北伝の大乗経典の中にも多くの本生譚が含まれている。

釈迦が釈尊の地位に達したのは、一般の輪廻転生の道をたどらないで、ただ一回きりの転生によってであった。例えばあのときの鹿は自分で、悪い王は徒弟の提婆達多であったと釈迦はいう。それぞれの本生譚が独立しているのではなく、別の本生譚では、釈迦の前生は別の動物

\*本学文学部

や王族や菩薩になっている。全体が一体になって釈迦の輪廻転生が語られるのである。釈迦はしかし入滅したあとは生まれ変わることはない。仏教文学では、仏教僧は死後、牛や蛇になり生前の報いを受ける。釈迦の場合、輪廻転生から解脱したので、永遠に一切が消滅して再生することがない。一般の仏教徒の世界では輪廻転生は、他の民族の間におけるそれと同じように、疑うことのない真理であった。

死者の魂が山に帰って野獣の中に入ることは前述した。ある種の野獣が死ぬと魂はその遺体から抜け出し、別種の野獣の中に入る。野獣の転生には何らかの母胎が必要であった。クレタ文明以来、女神を中心にしてその周囲に野獣がうづくまる図がある。ギリシア語でこの女神を野獣たちの女主人（ポツニア・テーローン）という。この女神が祖霊たちの表われである野獣を生む母胎であった。母胎に入る精子は何であったのか。それは死後三日を経て山に帰る死者の魂であった。それはゾロアスター教のフラワシでもあった。

山の神は恐ろしい印象を与える山姥に変化しているが、一方では金太郎の母のような育児をする女神でもあった。牛方と山姥の話では、山姥が牛方の牛を食い、さらには牛方をも食おうとしてあとを追う。牛方は最後は山姥の家に逃れるが、家にいる山姥の娘といっしょになって山姥に熱湯を注いで殺してしまう。牛方は山の神の対偶神の成れの果てであろう。牛方は山姥を殺してその娘と結ばれる。これは古代人が考えた生産原理である母胎の更新を表わしたもので、この再生した山の神が野獣の女主人として熊、牛、兎などを周囲に侍らせて死者の魂を受け入れたのである。

死の直後の通夜の席に、未婚の女性を同席させない風習が広く見られるが、これは未婚の女性の妊娠を恐れたためで、有夫の女性なら問題はなかった。生まれる子供に死者にゆかりのある名をつける風習が広く見られる。隔世遺伝という概念は、昔の人は知る由もなかったが、経験で気付いていた。世界の神話や昔話では、年とった山姥と金太郎や八岐大蛇退治に出る老夫

婦と娘、あるいは赤ずきんとお婆さんのように、若い両親と子供としては出てこない。天照大神と天孫ニニギノミコト、竹取りの翁夫婦とかぐや姫、桃太郎と老夫婦の場合も同じである。

死者の魂は山の神の胎内に入り、野獣として誕生する。それは山姥と熊のような対偶であり、金太郎や桃太郎は、野獣ではなく人間として出現する、これらの子供は、祖先の母胎からこの世に現れた祖先の子、神の子であって、輪廻転生の一つの局面でもある。

臨死体験をした者の報告を見ると、臨終の肉体から離脱した魂は、それが男性の場合は一人の若くて美しい女性あるいは娼婦によって暗い森の中かトンネルの中を導かれ、お花畑あるいは荒涼とした原野に出る。そこには、蘇生してから分かるのであるが、自分より二、三代前の、自分が見たことのない爺婆が立っていて、お前はここに来るのはまだ早いから帰れと諭す。

臨終の人間から離脱した魂が、あの世で老爺・老婆に会い、この世に戻ってくるのは何を表象するのであろうか。それは死者の魂が祖霊のもつ生産力の根源である大地の母胎に触れ、あるいはその中に入り生まれ変わって帰還することを表わしたのである。臨死体験者があの世で見た爺婆は、山の神である山姥と結局のところは同一の存在と考えられる。

山の神や極楽の祖先は地上の存在である。一方、人間は土葬され、魂は地上にある山に帰らないで、地下にある死者の国に帰る場合があった。死者の魂が地下にゆき、春になると地下の国から地上に戻るという循環は、穀物の枯死と、地上に落ちたその種子の再生と連動した。地下には地下界の女神（と男神）がおり、死者の魂あるいは熟して地上に落ちた穀物の魂は半年は地下の男神あるいは女神のもとで過ごし、春の到来と共に地上に出て芽を出す。メソポタミアの『イシュタル女神の冥界下り』では、穀物が人の手によって刈り取られ、殺された穀霊が地下に下り、死者の国の女王であるエレシュキガルのもとにとどまる。初春にエレシュキガルの地上の対偶であるイシュタル女神（エジプトのイシス、ギリシア・ローマのアフロディテ・ヴ

イーナスに相当する)が冥界に下り、自らもいちど死に、わが子であり夫でもある穀霊と共に再生させてもらい地上に戻ってくる。

母子の神が地上に蘇ったとき、イシュタル女神の神殿に設けられた舞台ではイシュタル母子の聖婚が行われ、観衆は春の再生を歓呼の声をあげて迎え、穀霊の殺害の第一幕、イシュタルの冥界下りの第二幕につづく第三幕が終わり、悲劇と喜劇が一体になった神聖劇が終了する。悲喜劇は元来一体になったものが発生的に古いもので、後になって悲劇と喜劇は分離したのであろう。

イシュタル(アッカド語の呼び名で、シュメール語ではイナンナ)と彼女の夫であり子である穀霊タンムズ(シュメール語ではドゥムジ<水の子>)は、ギリシア神話のイオカステとオイディプスに相当する。イオカステはオイディプスの母であるが、夫のライオス王がオイディプスの手にかかって殺されてのち、彼の王妃となり子供をもうける。オイディプスということばは足の腫れ上がった者を意味する。オイディプスが生まれたとき、占い師がこの子は父を殺すだろうと予言したので、踵を針で刺して捨て子にした。そのため、足が腫れてオイディプスは跛行を余儀なくされた。

オイディプス王は、『観無量寿経』に出る阿闍世王に相当する。阿闍世が誕生したとき、占い師はこの子は父を殺すと予言する。父王は生まれた子の足に金の針を刺して捨て子にする。あるいは、楼閣から投げ落とす。子は足指を折って跛行する。阿闍世は長じて父を殺し王位につく。当麻曼荼羅にはこのモチーフが織られている。跛行するのは、ユダヤ人の祖であるヤコブがそうであり、日本武尊がそうである。中国の夏王朝の祖といわれる聖王禹も跛行した。片目が盲目であったり、片手が萎えていたり、片足が萎えているのは聖性の保持者とされた。

イシュタル=タンムズ、イオカステ=オイディプス神話は、母子神の原型をなすが、これらの伝承では、子は殺されたり捨て子にされて異界に入り、帰還したあと母の胎内に入って自らを再生産する。タンムズもオイディプスも母の

胎内からこの世に生を受け異界にゆく。異界にはこの世の母や王の対偶と考えられる存在がいる。これらの人物は、臨死体験者が一様に語る、自分たちの魂があこの世の入口で出会う祖先たちに相当する。タンムズやオイディプスは、異界の母や王にもこの世界に帰還するように諭されることはない。子はこの世に帰還して再生するとき、母の胎内に入るのが特徴である。

5月14日(旧暦では4月14日)当麻寺では練供養が行われる。二十五菩薩迎接会ともいい、古くは迎講ともいった。法会は菩薩講中によって行われる。午後4時ごろ、第1鐘を相図に、中将姫如来像の御輿を引僧と信者が娑婆堂に導き、第2鐘で真言宗僧徒が曼陀羅堂に出仕、第3鐘で浄土宗僧徒も曼陀羅堂に出仕する。第4鐘が鳴ると、天人以下二十五菩薩が曼陀羅堂に出る。このあと、浄土僧は娑婆堂、真言僧は曼陀羅堂の所定の席に着座して来迎和讃を唱える。

この和讃につれて観音・勢至・普賢以外の仏陀が天人を先頭に娑婆堂前に整列する。曼陀羅堂からは観音が蓮台を捧げ、勢至・普賢と共に足を前後し、体を揺り動かしながら橋を渡って娑婆堂に練る。観音は蓮台に観音像を安置し、勢至がその像を撫で、つづいて観音・勢至が中将姫に対して奉奏舞を舞う。終わると、二十五菩薩は僧侶・御輿を連ねて曼陀羅堂に帰還する(西角井正慶編『年中行事辞典』(東京堂、1958年、448頁)。

曼陀羅堂と娑婆堂の間にはゆるい傾斜があり、このゆるい坂の上に高さ1メートル、幅1.5メートル、長さ100メートル程の板の通路を設置する。板橋の両側は参詣人、見物人で埋まる。曼陀羅堂は仏の世界、極楽を、娑婆堂は人間の世界、穢土を表象した。『イシュタルの冥界下り』と対比すると、イシュタルの住む世界は曼陀羅堂に、タンムズが再生する前に下りてゆく死の女神エレシュキガルが統治する世界は娑婆堂にあたる。第一段階の中将姫の娑婆堂降下がイシュタルの冥界下りにあたる。当麻寺は現在、真言宗と浄土宗の二宗によって法会が営まれる。

当麻寺練供養には、若くして死に、冥界に下りてゆくタンムズにあたる中将姫の子としての

存在が一見ないようであるが、観音が奉持して娑婆堂に下る蓮台に安置する小さい観音像がそれにあたる。この場合、小観音を迎えて下りる大観音が、死すべき存在であるとも考えられる。東大寺二月堂のお水取りでは、大観音のうしろの厨子に入った小観音が3月7日に前面に出御する。死の儀礼の期間である上七日の終わりに観音は死から再生し、再生の儀礼の期間である下七日に入る。

観音は、曼陀羅堂から娑婆堂に下りるとき、蓮台を捧げ禹歩あるいは反閤へんぱいといわれる跛行をしながら勢至・普賢らと板橋を渡る。娑婆堂から曼陀羅堂へ帰還するときにも同じような反閤が見られる。聖王禹は治水のために全国を歩き回ったために、片足を引きずっていたといわれる。それぞれの聖者は、その跛行について説明されているが、聖性の表象であることは前述した。

平安時代末から鎌倉時代にかけて、今日の日本仏教の基礎を築いた祖師たちが出現し、飛鳥・奈良時代の仏教とは異なった民族宗教をつくり出した。当麻寺は、真言宗と浄土宗の法会が修せられるが、二宗はもちろん白鳳仏教そのものではない。しかし真言宗もさることながら、『浄土三部教』に依拠する浄土宗もそろって、中央アジアの仏教、その根底にあるヘレニズムやイラニズム（ゾロアスター教的世界観）の影響を受けているので、白鳳仏教の伝承をもつ当麻寺の法会を修するのに適していたと考えられる。

曼陀羅堂と娑婆堂との間に設けられた100メートルほどのやや傾斜のある板橋は、あの世とこの世を繋ぐ橋である。日本神話では、天孫ニギノミコトは天の浮き橋つまり虹の橋を渡って地上に降り立つ。イラン神話では、聖なる山の中腹とこの地上が、チンワト橋（分かちの橋）で繋がれている。神々の世界を中心にすれば、地上はあの世であり地獄である。神は再生するためには地上に下り、また天に帰還しなければならなかった。

曼陀羅堂から娑婆堂への往還は、観音の再生儀礼であった。儀礼は仏教の法会の形式をとるが、古い形式に則った季節の再生儀礼である。

浄土教に基づいた法会としてお練りが修せられているが、飛鳥・奈良仏教の形式ではなかった。当麻寺の本尊は食堂に安置されている弥勒如来の塑像（国宝・白鳳時代）で、観音ではなかった。飛鳥時代の弥勒仏は小型、中型のものは石像で、大型のものは塑像であった。観音は弥勒のあとに栄える仏菩薩で、自体が石像で、石から生まれる仏であったので、地藏と共に同系の仏であった。

弥勒はイラン語ミフラクを写音したもので、梵語マーイトレーヤを写音したのではない。ミフラクは中世イラン語で、古代語ミスラカ〜ミトラカの転化したものである。ミスラカ〜ミトラカもとの形はミスラ〜ミトラである。ミトラは4世紀にキリスト教がローマの国教とされるまでは、ミトラス教の主神としてキリスト教の教義に大きな影響を与えた。冬至の子、神の子、母子神、救世主、最後の総審判、終末論、復活、地獄、煉獄、悪魔などの概念は、キリスト教がユダヤ教の教義からあるいはミトラス教の教義から学んだ概念である。ユダヤ人は前6世紀のバビロンの捕囚時代、イランから流入してきたゾロアスター教の影響を受け、上記の諸概念に接し、いくつかを教義にとり入れた。

弥勒は56億7000万年あと救済者としてこの世に出現し、民衆を救うと信じられている。真言宗は未来仏として弥勒を信仰するので、真言宗が成立した9世紀の初頭から当麻寺の本尊に参与するようになったであろう。弥勒の本体であるミトラは、イランがイスラム化し、シーア派イスラムを打ち立てたとき、イマーム信仰の中に救世主思想を導入した。救世主は、キリスト教とちがひ、期待されるもので、特定の人間に帰せられるものではなかった。ゾロアスター教から学んだユダヤ教の救世主も特定の人間に帰せられなかった。

曼陀羅堂には中将姫が蓮の繊維で織ったといわれる曼陀羅が掛けてあり、崇拝の対象になっている。実際は絹糸で織った浄土変相図で、本来は『観無量寿経』を根拠とする浄土教のものであるが、古くから法会に関わってきた真言宗の用語が一般化したと考えられる。このような

曼陀羅や変相図の起源は、紙や布に描かれた仏菩薩や天人の絵とは異なり、壁に掛けたり地面に敷いたじゅうたんやギリームにまでさかのぼるものである。壁の向こう側が自動車置き場、あるいはごみ捨て場になっていても、その壁に聖性が宿ると信じられた場合は礼拝の対象となった。壁にはしばしば神話の世界を描いた織物が掛けられた。聖性があると考えられる場所には同じようにじゅうたんやギリームが敷かれた。

現在イランはシーア派イスラム教国となり、偶像の崇拜には厳しい禁令が敷かれている。絵画による聖者像は、頭部や顔面の処置などを施して民衆の間に普及している。これに対しては狂心的な破壊活動はない。一方、シーア派3代目イマームであるホセインがカルバラ（イラクの首都バグダートの南方にある）で殉教した様子が、1.5メートル×2.5メートルほどの板紙に描かれ、太陰暦1月10日に下町の信者に絵解きの説教が行われる。7センチ×10センチほどの空間に、ある行事の経過が描かれるミニチュア（文学作品の写本の中に挿し絵の形式で残っている）の大版で、事件の経過も広い空間を利用してもっと詳しく描かれる。これは浄土変相図と同一のもので、釈迦の誕生から入滅までの伝記を壁面に彫刻した長大な巻物風の絵画は、一枚の絵の中に描かれた変相図とは異なる。

当麻曼陀羅は前述したように浄土変相図で、浄土思想に則っているが、真言宗の用語に従って曼陀羅と呼ばれる。由来はよく分からないが、当麻寺には二つの曼陀羅が伝えられている。一つは重文指定の室町時代文亀年間(16世紀初頭)に転写された変相図で、もう一つは古曼陀羅を貼りつけてあった板で、裏板曼陀羅と呼ばれるものである。この板には、仏・菩薩の像が剥がれないで残っている。

古い時代、当麻寺では二つのいわゆる曼陀羅が掛けられ、信者に拝まれていたと推察できる。イランのシーア派のカルバラ殉教図も、この変相図と目・鼻・口・耳をとり去った白い顔のついた聖者ホセインの像とその母ファーテム（初代イマームのアリーの子でムハンマドの娘）たち親族の像の二つであった可能性がある。イス

ラム化する以前のササン朝文化では、二つの絵は当麻曼陀羅の原型に近い変相図と聖者像であったと思われる。二つの絵の一つは母性原理である母神と、一つは母神から生まれた童子神の非業の死を描いたものであった。

因みに真言密教の二つの曼陀羅は金剛界曼陀羅と胎藏界曼陀羅である。一つは金剛石のように固い男根を象徴する男性原理の曼陀羅で、一つは女根を象徴する女性原理の曼陀羅である。胎は大地の子宮を指し、蔵も地蔵（クシティ・ガルバ）つまり大地の子宮を表わす。二つはインド文化のリング（男根）とヨーニ（女根）を表象するもので、死と再生を実演するものであった。人物像は女性原理を表わし、変相図は誕生から死までの神の子、大地から生まれ出た穀霊の一代を描いたものである。

中将姫によって表象される女性原理が登場しない二十五菩薩の橋渡りの法会はいくつかある。兵庫県小野市の浄土寺では、阿弥陀を安置する浄土堂（極楽）と釈迦を祭る娑婆屋（現世）の間に橋が架けられ、二十五菩薩が浄土堂から娑婆屋に向かい、死者の手を引いて浄土堂に戻る。このとき、半裸形の阿弥陀立像を台車に乗せて牽き、死者を極楽に救い上げる（中尾堯「聖者崇拜と祖師信仰」大隅和雄編集『因果と輪廻』春秋社、1986年、294頁）。

東京世田谷区奥沢の浄真寺のお面かぶりの行事は三年に一回、8月16日に行われる。ここでは二十五菩薩の面をかぶった人々が極楽堂に集まり、口々に和讃を唱えながら来迎橋を渡り、娑婆堂に入る。そこでこの寺の開祖の像をもって、再び橋を渡って極楽堂へ帰る（服部幸雄「橋・道」『is』27号、ポーラ文化研究所、1985年、70頁）。

京都の東山泉涌寺内の即成院では、十月の第二日曜（または第三日曜）に二十五菩薩供養がある。本堂を極楽浄土、地蔵堂を娑婆に見たてて橋が渡される。荘厳を極めた行事であるが、歴史は古くなく近代の復活であるという。その他、大阪平野区の大念仏寺で5月1日から一週間行われる来迎会では、二十五菩薩は出ず、十菩薩と簡略化されており、橋の形式も来迎橋と

いう雰囲気はやや弱い（山路興造「橋と芸能」『自然と文化』特集 橋，日本ナショナルトラスト，1984年，32-33頁）。

当麻寺の法会には中将姫が再生した小観音を連れて帰還するモチーフが入っている。来迎会自体，北伝仏教がとり入れた再生儀礼であるが，当麻寺の儀礼にはさらにイシュタル・タンムズ型の再生儀礼が付加されたと考えられる。

垂仁天皇7年秋7月7日，側近の者が天皇に申し上げた。当麻の村に當麻蹶速たぎまのくえはやという力持ちがいます。この男は，自分の力に並ぶ者はいないだろうが，何とかして力持ちと出会い力比べをしたいといっております。天皇は群卿たちに，當麻蹶速に勝る者はいるだろうかと尋ねた。すると一人の臣が，出雲国のみのすくねに野見宿禰という者がいます。この者と蹶速を取り組ませてみたらどうでしょうかと申し上げた。その日に出雲国に宿禰を呼びにやらせた。天皇は野見宿禰と當麻蹶速に角力をさせた。宿禰は蹶速のあばら骨と腰骨を踏み砕いて殺してしまった。宿禰は蹶速の領地を与えられ留まって天皇に仕えた。

垂仁天皇28年冬10月5日天皇の母の弟倭彦命が亡くなった。このとき，近習の者らを陵の周囲に生き埋めにしたので，昼夜うめき声が聞こえた。ついに死んで腐り出し，犬や鳥が食った。天皇は殉死を禁じた。32年秋7月6日，皇后日葉酢媛命ひばすひめが亡くなった。野見宿禰は出雲国から土部百人を呼んで，埴土で人や馬や物の形をつくって天皇に献上した。そこでこれらの埴輪で生きた人馬の代わりをした。それで本姓を改めて土部臣といい，天皇の喪葬を司るようになった。

7月7日（旧暦，新暦）は七夕のことで，7月15日の盂蘭盆の導入部で，死や葬と関連があった。7月7日は6か月前の1月7日の人日と対偶関係にある。前述したように，正月1日から6日まで魂は鶏・犬・羊・豚・牛・馬の中を次々と転移してゆき，7日に人間に入って人間として生まれ変わる。この日から小正月の1月15日まで再生した人間の祭りにあたる。1月7日は再生の日であると同時に，新年で最初に死刑を執行する日であった。つまり，この日は生

の日であり死の日でもあった。1月8日は穀物の日であったので，死者の魂は穀物の中に入った。

7月7日はこのような人日の対偶であった。7月15日の盂蘭盆と1月15日の小正月が対偶関係にあることも明らかである。7月7日に野見宿禰を呼びにやり角力を取らせたのであるが，角力を取るのは7月7日であることの伝承がこのような形で語られたのである。7月7日は人間を殺害する日で，ここでは競技による殺害の形式が見られる。7月7日に殺される者は，一方では死者を再生させるための殉死者である。1月7日の人日に処刑される者は，古代の思想では天帝に対する初物としての供物であり，新年で死から再生しようとする者たちの代死者でもあった。その魂は破壊されることなく，穀物の中に入って穀霊となり，輪廻転生した。

角力（相撲）は神事であることは明らかで，現在の大相撲の中にもその名残が多く見られる。土俵そのものが祭壇であった。その方円の表象は地と天，死と再生の二つの祭壇が合一したものである。土俵を築き固めるとき仕切り線の間に穴を開け，その中に勝栗，米，酒などを入れて埋め固める。穴は祭壇中央の凹みで，供物を供える場所である。祭壇と中央の凹みは大地のへそで，祭壇の上での勝負は，本来は死を賭けたものである。その死は，ある人の再生のために行われる代死で，犠牲死であった。

角力は現在も季節の変わり目に行われ，山，川，海，島などの霊が戦うことになる。この場合は，宇宙の再生に際して，宇宙の構成要素を戦わせて，宇宙の再生のための犠牲を選出したのである。現在はスポーツ化して，優勝力士がいちばん尊ばれることになっているが，古くは負者も宇宙（神）を復活させる力として尊ばれたと考えられる。相撲に負けて殺された當麻蹶速は，古くは単なる敗者ではなく，当麻寺の弥勒や観音の再生のために行われた初期仏教の再生儀礼の供物であった。殺生禁断の日本仏教ではとても考えられないことであるが，殺される人は弥勒や観音の化現で，宇宙の運行を元の秩序に戻し，衆生を救助するために死んでいったの

である。

野見宿彌は天皇家の葬儀を管掌し、埴輪をつくって古墳の上や周囲に立て、死者儀礼を行った。三段築成であれ五段築成であれ、方墳や円墳は祭壇を積み重ねたもので、竪穴あるいは横穴墓は、相撲の土俵の中央に開けた、米や勝栗を入れた穴にあたる。死体は天帝に捧げる供物であり、魚や野獣や家畜の肉、野菜、木の実、菓子類と同じものであった。

垂仁天皇皇后日葉酢媛命が亡くなったのは32年秋7月6日であった。野見宿彌が葬儀をとり行ったのは想像に難くない。葬礼競儀としての相撲が取られたはずである。西アジアの例を見ると、敗者の血を死体あるいは墓にかける習慣があったが、日本では水銀朱やベンガラが用いられたので、敗者の血を注ぐ習慣はなくなっていたかも知れない。あるいは二つの習慣が共存していたとも考えられる。

7月6日の忌日は、人為的な日付であろう。以前、聖徳太子一族（愛馬まで含めて）の忌日が冬至と春分の間の節目節目に配せられていることを論じたが、この場合は、野見宿彌の埴輪と深い縁があるので、相撲の前日に忌日を設定したのでであろう。垂仁天皇は99年秋7月1日に亡くなった。これも、7月1日から7月15日までの祖先祭の初日であるので、縁がないというわけではない。

皇極天皇元年夏4月8日、百済の王族翹岐<sup>ぎょうき</sup>が従者をつれて天皇に拝謁した。5月21日、翹岐の従者の一人が死んだ。22日翹岐の子が死んだ。24日、翹岐は妻子をつれて百済の大井（河内長野市大井）に移り、子を石川に葬った。7月22日、朝廷は百済の使者智積らを宮中の宴会に招き、健児に命じて翹岐の前で相撲を取らせた。智積らは宴会のあと退出し、翹岐の門を拜んだ。

ここでは、相撲は7月7日ではなく7月22日に取っている。何かの都合でこのような日付になったと思う。王族大使の翹岐の子が臨終になったのでであろう。従者の一人が一日前に代死している。ひょっとしたら、従者は相撲のような競技に敗れて殺されたのかも知れない。あるいは、翹岐の子が死んだのは5月であるので、季

節的に相撲が取られなかったので、自殺か他人の手による殺害であったとも考えられる。あるいは、従者の死と翹岐の子の死は、偶然につづいたのかも知れない。

7月22日は下弦の日で、7月15日の盆祭りのあとの最初の祭日であった。上弦の日と下弦の日は月々の祭りが集中して行われる日である。7月23日、24日は地蔵盆の日である。朝廷は翹岐の死児の供養をしてやったのではないかと思われる。別の見方もできる。

5月5日の端午節にも相撲をとった。7月22日は7月7日の七夕から二週間あとにあたる。翹岐の子が死んだのは5月22日である。5月22日は、5月5日の端午節の約二週間あとにあたる。相撲をとる日が、節目の二週間あとにもあったのかも知れない。そうすれば、5月22日は翹岐の子の忌日ではなく、人為的に相撲節に合わせたのだということになる。持統天皇9年5月21日、隼人の相撲を飛鳥寺の西の槻の木の下で取らせ、皆が見物した。5月21日前後には注目するような人物の死の記事がないので、これも翹岐の子の死亡日とされる5月22日と何らかの関連をもつであろう。いえることは、翹岐の子が5月22日に死んだとは考え難いということである。

東京墨田区両国の回向院<sup>えこういん</sup>のそばに旧国技館があった。両国とは、隅田川が武蔵国と下総国の間を流れていたなのでその名前が起こった。諸宗山無縁寺と呼ばれるように、無縁仏が集合する川原で、仏教以前からここが境界とされ、人々によって供養された。庶民の死体の遺棄場であり埋葬地でもあったであろう。明暦の大火(1657年)の焼死者(十万人を超えた)を供養するために幕府が回向院を建てた。刑死者もここで供養された。例えば有名な義賊鼠小僧次郎吉(1832年処刑)の巨大な石碑が子孫の中村氏の手によって建立されている。明暦の大火のあと、幕府はここで勧進相撲を興行し、以後しばしば相撲が興行され、旧国技館の成立にいたった。

東京足立区と荒川区にわたる地域にある千住は、奥州街道、日光街道への入口にあたる江戸と外界の境界にあたる地で、江戸時代の小塚原<sup>こづかづら</sup>

の刑場があった。小塚原は古塚原とも書かれたように、刑場になる前から死体を埋葬した境界の地であった。境界であったので、宿場と商店と遊郭が栄えた。ここにも回向院がある。入口には痛ましい吉伸ちゃん事件を追悼する地藏が立つ。内部の墓地には、吉田松陰、橋本左内、水戸浪士らの墓が林立し、その上で志士たちが処刑された三尺四方の一枚の黒石が中央にある。鼠小僧の墓石もある。金網が掛けてあるが、参詣人が欠いて帰るので、これで何代目の墓石になるとは住職のことばであった。この千住の地においても、回向院あるいはそれ以前からの墓地の怨霊を供養する相撲興行が行われたにちがいない。

死者を供養するために相撲を取るというのは、死者を再生させるということである。刑死者を再生させるとは変な論理であるが、供物として天帝に供えられた死者は、神のもとでは平等な人間あるいは動植物になる。生者も死者もすべてが宇宙と連繫しているのだから、山、川、海、島などの精霊の代表である力士を戦わせることによって宇宙を活性化し、同時に死者を再生させる。『江家次第』には、相撲節会において、片方の力士はひさごをつけ、他方の力士は葵をつけよとある。この場合、日照りと長雨に対する呪術として相撲を取る。

文徳天皇が亡くなったあと、一の宮のこれたか惟喬親王と二の宮のこれひと惟仁親王が残ったが、公卿らが相談し、競馬・相撲の儀式をして、その勝ち負けによってどちらかの親王に天皇の位をお授けし

ようということになった。十番競馬では、惟喬親王がはじめの四番に勝ったが、あとの六番は惟仁親王が勝った。相撲の儀式では、惟喬親王は名虎を出し、惟仁親王は能雄を出した。なかなか雄雌が決しなかったが、叡山の僧えりやう恵亮和尚の修法によって能雄が勝ち、その結果、二の宮の惟仁親王が勝ち、清和天皇（のちに水尾天皇みずのおとも）の位についた（『平家物語』巻第八 名虎）。

競馬も相撲も単なる節会の競技ではなかった。新しい天皇の出現に際して行わなければならない闘争であった。結婚式で、あるいはその直前に相撲を取る風習があるが——アイヌの結婚式では子供が相撲を取る——新しい夫婦の誕生を賦活する競技であった。天皇も新郎新婦も宇宙の運行と連動して生存する存在である。お祝いの競技とされたであろうが、死と再生の経過における途中の闘争であった。それは臨終の苦悩であり、出産の苦痛でもあった。

当麻寺には、中将姫の伝説と相撲の伝説が伝承されている。この地に寺が建てられる以前も、この地は二上山麓にある奥津城で、広い共同墓地を擁していた。その名残は、現在も寺に隣接する広い墓地に見られる。古代の人々は、宇宙の運行、季節の移動、人体の律動、生活の反復は、すべてが連動していると考えていた。これらの最上部に神仏や王の身体があり、相撲や競馬の競技をして神仏や王を再生させることにより、宇宙の再生を促進し、その恩恵を受けて国や村や個人の幸福が保証されると考えたのであろう。



## The Annual Rituals of Taima Temple

Eiichi IMOTO

Taima Temple has preserved a tradition of two rituals of death and resurrection. One of them is the ritual of Princess Choojo who goes down from the paradise to this world and take little Kannon to the paradise.

It is a Japanese version of the descent into the underworld by goddess Ishtar. She takes her husband=son Tammuz out of the underworld where he has been dead, and brings him to life. This tradition may have come to Taima Temple from ancient West Asia.

Another ritual was wrestling. According to the legend, Nomino-sukune wrestled with Taimano-ke haya; the latter lost in the contest and was killed, his blood was sprinkled over the grave to invigorate the dead in the underworld.

The wrestling ritual has been held on July 7th of the year. It was the beginning of the season of ancestor worship. Ancestors would come to this world and were invigorated by blood, meanwhile men of this world would be resuscitated by contact with ancestors.